

自己犠牲についての自問自答

大津 隆文

過日NHKで『星影のワルツ』というドラマを見た。東北大地震で津波に攫われ三日間海上を漂流、救助された男性の実話だ。仲の良い夫妻（遠藤憲一と菊池桃子が好演）で津波の直前二人は体を紐で結び合っていたが、夫だけが助かってしまう。「どうして自分だけ助かったのだろう。代われるものなら代わりたかった」と彼は嘆く。自分だったらどうだろう。自分だけが生き残り、事後的に本当に代わることが出来るとしたら代わるだろうか。自信がない。

『方丈記』の鴨長明の時代、人々は飢餓に苦しんでいた。ある二カ月間、長明が京都市内（一条から九条、京極から朱雀）の路傍の死者を数えて回ったところ、四万二千三百余に及んだというから驚く。飢えて死ぬ家族の実情を見ると、親子では子より親が先に亡くなり、夫婦では相手への愛情の深い方が先に亡くなるという。自分のけなしの食べ物を譲るためだと長明は言う。

自分だったらどうだろう。もしかすると後に残る方に回ってしまうのではなからうか。これまた自信がない。

人間にとって自己保存が根源的な本能だと思う。自己犠牲は愛がこの本能に打ち克つことができる証である。しかし、家族ではなく赤の他人に対してはどうだろうか。

思い浮かぶのは一九八二年一月、厳寒のワシントン飛び立った飛行機が直後にポトマック川に墜落した惨事だ。全員絶望と思われたが、奇跡的に六名が流氷にしがみついていた。救助ヘリコプターから救命ロープが下ろされたが、当の男性はそれを近くの女性に譲ったのだ。最後にヘリが戻ってきた時、彼は水面下に没していた。

自分だったらどうだろう、同じことが出来るか。自信は全くない。自分に向かってロープが下ろされるまで待つことは出来る、他人のロープはとらない、言えるのはその程度である。

何が彼（四六歳、銀行監査官）にかくも気高い行動をとらせたのであろうか。隣人愛か騎士道精神か理性か、世界には素晴らしい人がいることを知るだけでも心が励まされる。